

【Ⅰ 若者が主催】

ぼち大人 事業詳細

事業名	ぼち大人vol.3「星の王子さま」			交付決定額	140,000円
趣旨・目的	本事業の目的は、演劇を通じて「何者かにならないといけない」という社会的な枠組みからの解放を促し、誰もがありのままの自分を受け入れられる場を提供することです。また、演劇が単なる特別な表現活動ではなく、日常生活と深くつながっていることを伝えることで、人々の暮らしに根ざした芸術の可能性を広げたいと考えています。 特に、18～39歳の世代に焦点を当て、この世代が抱える「自己実現」や「社会的役割」といったプレッシャーから解放される場を創出します。日常が続いていく中で、演劇がその流れの一部として自然に溶け込み、観客が自身の人生と照らし合わせながら新たな視点を得られるような作品を目指します。				
実施内容	演目・曲目等				
	演目「星の王子さま」 作:寺山修司				
実施内容	構成・出演者・主なスタッフ等 / 展示作品の種類・点数、主な作品名・出品者名等				
	■構成・演出・音響／木村佳南子(非・売れ線系ビーナス・福岡) ■出演／ぼち ■ゲスト出演／宮村耳々(非・売れ線系ビーナス・北九州)、富田文子(フリー・福岡) ■HP編集／秋山舞 ■写真／あだな ■音声出演／田崎大輔(D-D・福岡) ■制作／ぼち大人				
実施日時	令和8年2月6日(金)19時半開演 2月7日(土)15時開演/19時半開演 2月8日(日)15時開演	実施回数	公演回数4回		
実施会場 (会場住所)	Cafe causa(北九州市小倉北区)	参加人数	43名		
実施の成果	助成金活用による工夫や実施の成果				
	1. 助成金を活用して行った工夫・広報の取組み 広域連携による創作体制の維持：演出家や出演者が福岡市・北九州市・八幡など各地に分散していたため、稽古は土日の長時間集中型で行いました。助成金を活用して公演期間中の宿泊費や交通費を補填できたことで、物理的な距離の壁を越え、妥協のない作品創作に集中できる環境を整えることができました。 小道具等の充実による「セッション性」の向上：演出意図に合わせて多種多様なアイテム(小道具・備品)を用意しました。これにより、演者同士や空間との「セッション性」が高まり、カフェという空間の特性を最大限に活かした、ライブ感あふれる質の高い公演を実現しました。 2. 事業を実施して得られた成果 「日常と演劇」の境界を越える表現の達成：寺山修司が提唱した「書を捨てよ、町へ出よう」という精神を現代においてどう体现するかを追求しました。結果として、演者の「プライベートなトーク」と「戯曲のセリフ」を往来しながら旅をするという構成を採用。これにより、観客に「誰もが自身の人生という舞台の演者である」こと、そして「演劇が終わっても日常は続いていく」というテーマを提示することができました。 寺山戯曲の現代的再構築：1968年初演寺山作品を、演者のリアルな言葉と接続させることで、18～39歳の若年層にとっても身近で切実な物語として届けることができました。これは、古典的な前衛演劇を現代の文脈で再生させる、意義のある成果となりました。 3. 事業実施における課題や今後の展望 【課題】コンセプトの言語化と具現化の葛藤：創作過程において「今、寺山修司を上演する意味」をいかに見出すかという点に非常に苦戦しました。時代背景の異なる哲学をどう現代に接続するかという問いは、表現者として大きな壁でしたが、試行錯誤を経て「プライベートトークとの往来」という手法に辿り着いたことは、今後の創作における大きな財産となりました。 今回、助成により実現できた「広域からメンバーが集う」スタイルを、今後自主財源でどう継続していくかが組織運営上の課題です。 【今後の展望】「対話型演劇」の深化：今回得られた「プライベートと虚構の往来」という手法をさらに深化させ、観客がより主体的に参加できる、あるいは自分事として捉えられる作品づくりを北九州から発信していきます。 日常生活に根ざした芸術活動の継続：演劇を特別なイベントで終わらせず、観劇後に街へ出た観客の「日常」が少し違って見えるような、生活基盤に根ざした活動をコンスタントに続けていくことを目指します。				
実施の成果	活動の様子				
	撮影 あだな				
最も注力した年齢層(計画)	18～39歳	参加者等の主な年齢層(実績)	18～39歳	40歳以上	
	(共催・後援・協賛関係機関がある場合) 名称と役割				
なし					
その他特記事項					
■寺山修司生誕90周年記念認定事業					